

氏 名	鈴木彩香
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 7996 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	属性叙述文の統語的・意味的分析
主 査	筑波大学 教 授 Ph.D.（言語学） 竹沢 幸一
副 査	筑波大学 教 授 博士（言語学） 杉本 武
副 査	筑波大学 准教授 博士（学術） 澤田 浩子
副 査	筑波大学 准教授 橋本 修
副 査	神田外語大学 教 授 Ph.D.（言語学） 長谷川 信子

論 文 の 要 旨

本論文の主目的は、いわゆる属性叙述文の統語的・意味的特性を、日本語のデータに基づき事象叙述文との対比の中で構成的な観点から明らかにすることである。

一般的に、属性叙述文は特定の時空間とは切り離されたモノの恒常的な特質について述べる文タイプとして、また事象叙述文は特定の時空間内に生起する出来事を記述する文タイプとして、それぞれ特徴づけられている。文タイプにこのような対立が存在することは、日本語研究においても伝統文法以来、認識されており、両者の区別が様々な文法現象の分析にとって重要であることが、益岡（1987）をはじめとする記述的研究において繰り返し指摘されてきた。一方、英語を中心とした理論的なアプローチにおいても、それに類する文のタイプ分けが、特に統語・意味・談話のインターフェイスにかかわる問題としてしばしば言及されてきた。そうした理論的な研究においては、この種の問題は主に不定名詞句の総称／存在という意味解釈の対立と関係づけて議論されることが多く、不定主語名詞句の解釈が述語の意味的性質とどのような相関関係を持つのかという観点から、事象叙述／属性叙述の対立に相当する現象が扱われてきた（Milsark 1974, Carlson 1977, Diesing 1992, Kratzer 1995 等）。

上述の 2 つのアプローチは、扱っている現象にかなりの程度、類似性が見られ、またその記述・説明にも共通した概念が用いられているにもかかわらず、議論の発端となる現象や重視している観点が異なるため、両者を関連づける試みはこれまでのところ十分になされてこなかった。本論文は、日本語に関する記述的研究と英語を中心とした理論的研究の双方に目を配りつつ、それらの研究成果を体系的、有機的に結びつけることのできる構成的な分析を提示することによって、日本語の記述的考察と普遍的な理論構築の両者に対して双方向的な貢献をもたらし得ることを論じている。

上記のような背景の下、本論文は具体的な目標として、次の 2 点を示すことを目指す。

I. 日本語の属性叙述文をより基本的な統語的・意味的要因に分解して構成的に分析することで、事象

叙述文との対比の中で構造的に論じることができることを示すこと。

- II. 日本語に特徴的な助詞の出現およびアスペクト形式に着目して叙述の対立を論じることが、構造に関する経験的証拠となり、理論的な研究にとっても重要な貢献となることを示すこと。

この2つの目標設定に基づき、本論文の各章では以下のような議論が展開される。

第1章「序論」では、日本語の記述的な属性叙述文研究と、英語を中心とした理論的な総称文研究について、それぞれのアプローチでどのような研究が行われてきたのかを概観し、その上で、両者を結びつけようとする本論文の試みがどのような問題意識と目的を持つものであるかを述べる。

第2章「事象叙述／属性叙述の対立に関わる諸概念」では、この対立に関わる要因として、①述語の意味的性質(場面レベル述語／個体レベル述語)、②裸名詞句の解釈(存在解釈／総称解釈)、③統語構造(TP/vPの分割に基づく主語の統語的位置)、④情報構造(トピック／フォーカス)、⑤テンス(存在テンス／総称テンス)という5つを抽出し、これらの要因のそれぞれについて、先行研究がどのような指摘を行っているかを概観する。

第3章「日本語における事象叙述／属性叙述の対立と主語」では、先行研究の批判的検討から提起された問題に答えるため、Kratzer、Diesingらの枠組みの中に情報構造とテンスの観点を組み込み、上記の①～⑤に示した要因がどのように事象叙述／属性叙述の対立を構成しているかという包括的な枠組みを提示する。具体的には、文が存在的なテンスをとるか、総称的なテンスをとるかという要因を中核とし、その他の4つの要因との関係を、統語構造に基づいて体系化する。そして、このような構造的体系化を行うためには、日本語の主語名詞句を標示する助詞の対立(ガ／ハ)に着目し、それを構造的に反映させることが重要であることを示す。

第4章「日本語における事象叙述／属性叙述の対立と目的語」では、主語名詞句を標示する助詞に着目した第3章での分析に対し、目的語名詞句を標示する助詞に着目することで、事象叙述／属性叙述の対立に構成的にアプローチする本論文の分析の利点を示す。これまでの日本語研究における事象叙述／属性叙述という捉え方からは、一見したところ主語と述語の関係のみがその対立に関わっているように論じられてきたが、この問題を名詞句の解釈と述語の意味的性質という観点から分解して考えることにより、目的語も議論の対象とすることができることが明らかにされる。また、主格目的語と対格目的語の対立、評価系／所有系の述語の主格目的語の対立という、2つの対立関係に焦点を当てることによって、主語の2つの統語的位置と並行的に、目的語に関してもvP内／外という2つの統語的位置を区別することで体系的な説明が与えられることを論じる。

第5章「非状態述語におけるル／テイルの対立：アスペクト形式に着目した習慣文の分析」では、述語のアスペクトと叙述としての意味がどのように関わるものであるのかという問題設定に従い、日本語の習慣文におけるル形とテイル形の対立を扱う。ル形習慣文とテイル形習慣文は、一見どちらも同じような意味を表しているように思われるが、主語からの数量詞遊離、副詞との共起関係、「ものだ」補文への生起、連体従属節への生起という4つの統語的環境を観察することによって、両者の間に解釈上の違いが存在することを示す。また、構成的なアプローチを採用することで、両者の意味解釈メカニズム、そして統語構造の違いに原理的な説明が与えられることを論ずる。

第6章「状態述語におけるル／テイルの対立：アスペクト形式に着目した知覚動詞の分析」では、非状態動詞におけるル形とテイル形の対立として扱った第5章の習慣文の議論と対照的に、知覚動詞というある種の状態性を持つ動詞において、ル／テイルのアスペクト形式の対立が文全体の意味派生とどのように関わっているかを論じる。知覚を表すオノマトペ動詞のル形とテイル形は、いずれも状態的であり、一見同じ意味を表すように思われるが、知覚の条件節の付加、時主題、身体部位の付加といった現象を観察することにより、ル形は場面レベル述語、テイル形は個体レベル述語であり、異なるプロセスで属性文を形成していることを検証する。

第7章「結論」では、上述の議論の総括を行い、日本語の属性叙述文を構成的に分析するという本論文のアプローチにより、記述的・理論的研究双方にどのような貢献がもたらされたのかを述べる。

審 査 の 要 旨

1 批評

属性叙述文については、これまで日本語学での記述的研究においても、英語を中心とする理論的研究においても、かなり共通した現象が取り上げられてきたにもかかわらず、この2つの研究はこれまで生産的な形で交わることはあまりなかった。本論文は、双方の研究に広く目を配りながら、構成的なアプローチを追究することで、それら2つの研究の間の橋渡しを目指した意欲的な研究であり、理論的研究から日本語の記述的研究への貢献および日本語の記述的研究から理論構築への貢献の両面において有意義な成果を含む、優れた研究であると評価することができる。

本論文の成果として特に評価すべき点の1つは、日本語の属性叙述文の分析に英語等の総称文研究で得られた理論的な知見を組み込むことによって、叙述のプロセスをまず、①述語の意味的性質、②裸名詞句の解釈、③統語構造、④情報構造、⑤テンスという5つの要因に分解し、日本語の叙述に関わる諸現象をそれらの要因の相互作用として構成的に論じることが可能にした点である。そうすることによって、これまで「逸脱的」あるいは「例外的」なものとして扱われてきた属性叙述文のふるまい（影山 2009）が、それぞれの要因の相互作用の帰結として事象叙述文との対応関係の中で分析できるようになった。

本論文のもう1つの重要な成果としては、構成的なアプローチを採ることにより、これまでの理論的研究では関連づけて論じられることのなかった日本語の現象を扱うことができるようになったという点が挙げられる。例えば、基数数量詞の遊離、助詞の対立、アスペクト形式の対立、オノマトペ述語の形態、「ものだ」総称文など、日本語に特有な現象を観察することによって、逆に英語などでは形式的に確認することのできない属性叙述と事象叙述の対立をより鮮明に浮かび上がらせることができるようになった。特に第4章での目的語の格標示に関わる議論、第5章での単純ル形とテイル形の解釈の違いについての議論、また第6章でのオノマトペ述語に基づく議論は、まさに日本語の個別現象を叙述一般に関する理論的研究の中に位置づけようとする試みであり、高く評価される。

もちろん、叙述に関わる現象は極めて広範にわたるものであり、本論文はそのうちの一部を扱っているに過ぎないことは言うまでもない。また本論文は、理論言語学の側から見れば形式化や構造化が十分に行われておらず、また記述言語学の側から見れば扱うデータの範囲が限られている、といった批判も当然あろうかとは思われる。しかし、本論文の価値は、記述と理論のバランスをとることによって、両者に益する分析を具体的に提示している点にあり、叙述研究全体に対する貢献は大きいと考えられる。

2 最終試験

平成29年1月23日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。